

地域研修報告書 2012



ワイド

北海学園大学の新聞「ワイド」に掲載された地域研修に関する記事の抜粋。記事には、学生が地域で実践した活動や、その成果について詳しく紹介されています。

学生バイトの実態 白書に

学生が地域で実践した活動や、その成果について詳しく紹介されています。

OUTPUT!



地域研修報告会



地域研修

1 ……『地域研修報告書』の発行にあたって

1 …… 地域研修ガイダンス

2 …… 地域研修1年間の流れ・研修地一覧

3～23… 地域研修ゼミ報告（2012年度 地域研修Ⅰ・Ⅱ 参加21ゼミ 計353名）

3 浅妻ゼミⅠ
鹿追町バイオガスプラントに関する学習と運営体験
研修地／鹿追町



4 浅妻ゼミⅡ
廃棄物処理・リサイクル産業と地域経済・社会
研修地／東京都・埼玉県寄居町



5 内田ゼミⅠ・Ⅱ
ぬかびら源泉郷における地域づくりとリーダーたち
研修地／上士幌町（ぬかびら源泉郷）



6 大貝ゼミⅠ
別海町の地域産業、地域医療の現状と課題
研修地／別海町



7 大貝ゼミⅡ
課題先進地、高知県で「いなかビジネス」を考える
研修地／高知県檜原町・四万十町



8 奥田ゼミⅠ・Ⅱ
歴史と文化の町の街づくり
研修地／江差町



9 北倉ゼミⅡ
グリーンツーリズム・part 9 食農とのむすびつき
研修地／長沼町



10 川村ゼミⅠ
学生アルバイトの実態
研修地／札幌市



11 川村ゼミⅡ
学生・若者と労働組合
研修地／札幌市



12 小坂ゼミⅠ・Ⅱ
帯広・十勝地域における自然エネルギー開発の取り組み
研修地／帯広市・鹿追町



13 小田ゼミⅠ・Ⅱ
地域循環型環境政策の取り組みに学ぶ
研修地／ニセコ町



14 佐藤ゼミⅠ・Ⅱ
北海道における発電所の状況と電力需給のあり方
研修地／厚真町・苫小牧市・伊達市



15 徐ゼミⅠ・Ⅱ
中国人観光客についての調査
研修地／釧路市



16 高原ゼミⅠ・Ⅱ
食のB級グルメによる地域活性化の現状と課題
研修地／富良野市・帯広市



17 西村ゼミⅠ・Ⅱ
財政再生団体・夕張市、地域再生への挑戦
研修地／夕張市



18 平野ゼミⅠ
札幌市におけるフェアトレード活動の実態と課題
研修地／札幌市



19 古林ゼミⅠ
サケを中心とする地域産業の形成
研修地／標津町



20 古林ゼミⅡ
軽種馬の生産・育成・流通および利用
研修地／新ひだか町・様似町・浦河町・日高町



21 水野ゼミⅠ・Ⅱ
東川町における朝鮮人労働、同町の町づくりを学ぶ
研修地／東川町



22 水野谷ゼミⅠ・Ⅱ
利尻島観光の持続可能性について考える
研修地／利尻富士町・利尻町



23 山田ゼミⅠ・Ⅱ
地域活性化・地域ブランド化と情報発信について
研修地／函館市



24 …… 地域研修報告会

2012年度

『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長

森下 宏美



「地域研修」は、地域経済学科の創設時に、将来の地域の担い手を育てるための実践型の授業として新設されました。2004年度に最初の研修が行われ、以後、経済学科でも実施されるようになり、また、「教育研究高度化特別推進事業」に採択されるなど、各方面から高い評価をいただきました。

皆さんは今回の研修を通じて、地域をどのように肌で感じ取ったのでしょうか。札幌のような都会にはない暮らしの問題への気づき、普段は体験できない第一次・第二次産業の現場での仕事、地域づくりの担い手の方々との交流、アンケートや聞き取りでの初対面の人たちへの働きかけなど、未知の経験が数多くあったはずで、それらの経験から、皆さんは是非、自分の住む地域も含め、地域における人々の生活に対する想像力を大きく育ててほしいと思います。

「地域研修」は、事前学習、現地での調査・研修、結果報告という一連の流れの中で進められていきます。事前学習ではさまざまな情報を集め、課題を整理したり仮説を立てたりしながら、調査の対象や内容、方法を決めていきます。現地での調査・研修では、自らの計画に沿って主体的に調査を進めます。そして、それによって得られた知見をもとに考察し、その結果を公表します。この流れは、対象は変わっても、ものごとを探究するさいの基本的な道筋です。大学での学修を通じて、是非ともこの探究心に磨きをかけてください。

この研修を通じて、学生同士の、そして学生と教員との交流が深まり、ともに学ぶ者同士としてのきずなが一層強いものになったと思います。研修によって得たすべての経験が、皆さんの社会での活躍の糧となることを強く願っています。

なお、この研修を実施するにあたり、地域住民や自治体・企業・団体など多くの方々から、多大なご協力をいただきました。最後になりますが、皆さまから頂戴いたしました数々のご厚意に対し、ここにあらためて、心より感謝申し上げます。

地域研修ガイダンス

2012年4月14日 40番教室



地域研修1年間の流れ

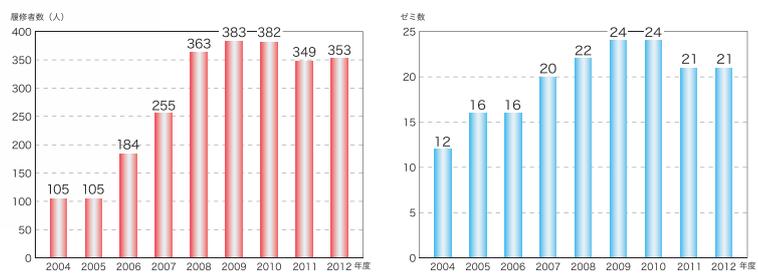
地域研修は夏休みに行われる現地研修（フィールドワーク）が中心ですが、そのためには事前の学習、研修後にその成果をレポートにまとめる作業、報告会でのプレゼンテーションまで、これまでの教室での講義・理論の要素に加え、実践的な学びが必要とされる複合的な学習です。

- 4月 ● 地域研修ガイダンス**
地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。
- 5月**
7月 ● 事前学習（研修テーマなどの決定）
ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、関連自治体・団体などから提供された資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。
- 8月 ● 地域研修実施**
10月
おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では関連自治体・団体・企業などからのヒアリングを行い、関連施設の見学や実地見聞、実態調査などを行って研修内容を深めます。
- 10月 ● 事後学習**
11月
ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめる。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行う。
- 12月 ● 地域研修報告会**
地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。
- 3月 ● 地域研修報告書の作成**
地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。

研修地一覧



地域研修履修者数と実施ゼミ数



浅妻裕ゼミ I

参加学生数 12人



浅妻 裕
経済学科
教授

鹿追町バイオガスプラントに関する学習と運営体験

研修地：鹿追町

研修目的

再生可能エネルギーは地域性を強く反映する。特に北海道はバイオマス賦存量・利用可能量が全国的にも高いとされている。実際に北海道でこの事業に取り組んでいる現場を視察し、現状を理解することを目的として研修を実施した。

研修地・日程

- 9月10日 鹿追町環境保全センター（座学）
- 9月11日 安藤牧場（視察）
鹿追町環境保全センター（実習）
- 9月12日 柳月工場（視察）
移動

写真キャプション

- ① 座学中。
- ② バイオガスを利用した自動車。
- ③ 防疫のため完全防備。
- ④ ハウスでの雑草取り。
- ⑤ タンクを高圧洗浄。
- ⑥ 作業を中断して昼食。



1



2



3

総括

鹿追町のバイオガスプラントは国内で最大級のものである。最大で1日81tもの原料が投入される。原料のふん尿は町内の酪農家から回収している。プラントで発電した電力はバイオガスプラントのある環境保全センターの施設運営に回されるほか売電も行っている。また、発酵した原料からは発電の他、「液肥」という堆肥も作られ酪農に伴う廃棄物問題を解消している。このようにエネルギー問題と廃棄物問題への対応を両立させるものとしてバイオガスプラントを位置づけることができる。さらに、売電事業や廃棄物処理費用などによって年間約3,000万円の収益をあげている。このように、鹿追町にとって、環境・経済の両面でバイオガスプラントが重要であることが把握できた。

今回、学生はバイオガスプラントの運営にも携わった。液肥をタンク詰めにしてラベル貼りを行い、トラックに積み一連の作業では、臭いへの戸惑いはやや見られたものの、廃棄物が再資源化されるプロセスを実感できた。また、施設内のビニルハウスでは、コジェネレーションとしての熱利用による作物栽培試験を実施しているが、学生は施設の雑草を一掃し、試験実施に携わった。鹿追町の協力に感謝したい。

学生研修記

鹿追町でみた循環型農業



河野 小夏
経済学科2年
北見柏陽高校出身

エネルギー政策について学んできた私たちは、鹿追町の環境保全センターへ地域研修に行ってきました。鹿追町は酪農が盛んな地域のため、家畜のふん尿の適切な処理が課題となっていました。そこで、環境保全センターではバイオガスプラントで処理をしてバイオガスと消化液を生産しています。

私たちは座学をしてから実際に施設の見学、体験をしました。農家の肥料として使う消化液をボトルに詰める作業や発電などによって得られた熱エネルギーを利用している温室ハウスの作業をさせていただきました。バイオガスプラントは廃棄物処理、エネルギー製造、CO₂削減、有機肥料製造の機能をすることがわかりました。もちろん利点ばかりではなく、施設では悪臭もありましたが、地域内資源循環をしていました。これからは、鹿追町のようなバイオガスプラントを全国にどうやって広めていくかが課題だと思いました。

思い出に残ったバイオガスプラントでの実習



大祐 大祐
経済学科2年
とわの森三愛高校出身

今回の地域研修では、新エネルギーの一つであるバイオマス発電をより詳しく身をもって学習できました。牛の糞尿、生ゴミなどを扱うこともあり施設の周辺は臭いがきつく、施設の中はそれ以上に臭かったです。具体的な作業としては、畑の肥料などになる消化液をポリタンクに詰めることと、ビニルハウスの雑草取りで、これを交代制で一日かけて行いました。普段札幌で生活していると中々味わえない泥と土と悪臭にまみれた実習は、ある意味新鮮で良い経験になり充実した研修だったと思いました。また、帯広のホテルや然別温泉では、皆で地元の名物料理や食材を楽しんだり、ゆったりと温泉に浸かったりするなど、研修以外にも楽しい事が多くゼミでの仲間一層深まった地域研修だったと思います。



4



5



6

浅妻裕ゼミⅡ

参加学生数11人



浅妻 裕
経済学科
教授

廃棄物処理・リサイクル産業と地域経済・社会

研修地：東京都・埼玉県寄居町

研修目的

地域研修Ⅰでは「静脈産業」のうち、川上の解体業者について多面的に学習した。今回その川下にあたるシュレッダー業者や廃棄物処理施設などを見学し、それらの産業と地域経済・社会の関係を考察した。

研修地・日程

- 10月11日 有明興業株式会社（視察・ヒアリング）
中央防波堤内側埋立地（視察）
- 10月12日 彩の国資源循環工場（視察・ヒアリング）
オリックス資源循環（視察・ヒアリング）
エコ計画（視察・ヒアリング）
- 10月13日 移動日

写真キャプション

- ① ヘルメットと作業服装着で施設視察へ（有明興業）。
- ② プラントの説明を受ける（有明興業）。
- ③ 有明興業での研修。
- ④ 有明興業ヒアリングを終え。
- ⑤ 寄居へ向かう東上線車内。
- ⑥ ASR（エコ計画）。



総括

事前学習として、静脈産業の川上から発生する鉄スクラップの全国的な流通状況、PFIなど自治体の廃棄物処理事業の運営方法、訪問各工場の事業について学習した。

初日に視察した有明興業は関東随一のシュレッダー業者である。自動車や家電製品などをシュレッダー処理し、RPF（固形燃料）などへの再資源化を行っている。流通拠点を複数設けるなどにより、廃棄物・再資源化物とも非常に広域で流通している。規模の経済性が顕著にみられる現場を学生も興味深く視察していた。

2日目には埼玉県の廃棄物処理施設を訪問した。ここでは最終処分場の他、リサイクルに関連する企業の高度な集積がみられている。最終処分場の建設に際しては近隣住民の強い反対もあったということだが、現在では、定期的な住民組織の立ち入り検査を認めるなどリスクコミュニケーションを図りながら事業を続けている。さらに、廃棄物をすべて再資源化することが可能なガス化溶融施設など高度に資本集約的な工程がある一方で、手分解作業により電子機器をリサイクルするという労働集約的な工程も見ることができ、リサイクル・廃棄物処理を多面的に理解することができた。

学生研修記

廃棄物処理の高度化による地域との調和

本年度の地域研修では、廃棄物のリサイクルや処理などの最前線を見学しました。

どちらの場所でも最新鋭の設備や、見たこともないような特殊な装置など、非常に見所が多く、機械が個人的に好きな自分はとても迫力を感じながら作業を見学することが出来ました。

また、設備や装置のことだけではなく、特に埼玉県の寄居町での見学を行っていた際、「地域住民の理解や協力」という言葉を伺い、とても自分の中で記憶に残りました。ただ廃棄物を無機質に処理するのではなく、環境にはもちろんのこと、「人にやさしく」廃棄物処理を行うことが、今後の廃棄物処理における一つのキーワードになっていくのではないかと、このように考えました。



尾崎 裕典
経済学科3年
名寄高校出身

自動車リサイクルその後を見る

今回は去年の自動車解体業の学習を活かし、解体後に廃棄物になってしまうものがどう処理されるのかという点に目を向け、廃棄物処理業について学習しました。学習するにあたって、研修では関東の廃棄物処理施設を訪れました。施設内や埋立地を見学していくと、安全な処理かつ細部にまで渡るリサイクルをするための選別・裁断の様子が見受けられました。事前学習の際に調べていたRPFという固形燃料について、全ての企業からお話を伺い、実物に触れることができたのでとても印象に残っています。また事前学習では知ることのできなかつた内容を聞くことができたり、施設内の温度やにおいを体で感じたりすることで、廃棄物処理業への一般的なイメージが払拭されました。施設近隣の方からの理解を得るための取り組みがあることも知り、廃棄物処理業の実態と現状を学ぶことができました。



齋藤 優
経済学科3年
千歳高校出身

内田和浩ゼミ I・II

参加学生数 18 人



内田 和浩
地域経済学科
教授

ぬかびら源泉郷における地域づくりとリーダーたち

研修地：上士幌町（ぬかびら源泉郷）

研修目的

ぬかびら源泉郷は、温泉街が衰退する中、湯めぐり手形を販売したり、毎朝熱気球の体験搭乗を行ったり、「源泉かけ流し宣言」を行うなど、地域活性化への取り組みを積極的に行っている。本地域研修では、質的調査法によって、地域づくりのリーダー層へ聞き取り調査を行い、そのプロセスを明らかにしていく。

研修地・日程

- 9月11日 「上士幌町のまちづくりとぬかびら温泉」
上士幌町役場会議室（町役場担当課から聞き取り）
全体ミーティング（宿舎食堂）
リーダー①への聞き取り調査1（文化ホール）
火曜会へ参加（文化ホール会議室）
- 9月12日 リーダー①への聞き取り調査2（文化ホール）
リーダー②への聞き取り調査1（文化ホール）
リーダー③への聞き取り調査1（山湖荘）
各グループでフィールドワーク（ぬかびら源泉郷内）
グループミーティング（宿舎食堂）
全体ミーティング（宿舎食堂）
- 9月13日 リーダー②への聞き取り調査2（文化ホール）
リーダー③への聞き取り調査2（山湖荘）
各グループでフィールドワーク（ぬかびら源泉郷内）

写真キャプション

- ① 上士幌町役場にて、聞き取り調査。② 「火曜会」との交流会。③ Cグループ 聞き取り調査。
- ④ フィールドワーク？メガ盛り・豚丼。⑤ Aグループ 山湖荘の前で。



総括

前期の内田ゼミは、ゼミ I（2年生）とゼミ II（3年生）が協力してゼミ学習を進めた。ここでは、具体的な地域づくりのリーダーたちの主体形成過程分析へ向けた質的調査法の習得をめざした。テキストをグループ毎に分担し、3年生がリーダーとなってレジュメをつくり、全体で報告して議論しながら理解を深めていった。そして地域研修では、ぬかびら源泉郷を訪ね、リーダー層3人の方々から各2回にわたる聞き取り調査を行った。また、若手の集まりである「火曜会」に参加し、リーダー以外の担い手からも話を聞いたり、空き時間には源泉郷内のフィールドワークを行ったりした。ぬかびら源泉郷再生の原動力であるリーダーたちは、何を考え、どんな経験や学びをもとに、そのようなまちづくりに取り組んでいるのか。まさに今回の地域研修の目的は、質的調査法を用いてそのプロセスを明らかにすることにあつた。

質的調査といっても、学生たちにとってはなかなか上手く話を聞き出すことができず、分析自体も中途半端になってしまった。しかし、地域研修そのものは、地域社会で暮らす生身の人々と直接出会い、直接話を聞き、直接体験する、とても良い機会になったと思う。

学生研修記

「変える」ということ



青柳 睦美
地域経済学科2年
網走南ヶ丘高校出身

上士幌町ぬかびら源泉郷は 1960 年代に栄えていたが 90 年代にはバブル崩壊の影響などにより衰退していった。そこからどうぬかびらを再興していったかを3人のキーマンに調査したのが今回の地域研修である。

再興のため、「源泉かけながし宣言」を始め、あの手この手でぬかびらを盛り上げようとしているお話を聞くことが出来た。中でも一番印象に残った話は地名変更の話だ。キーマンの1人が糠平と書くと「とうびら」などと呼ばれ、読み間違えられ覚えてもらえないので、ひらがなで「ぬかびら」とする構想を出した。その糠平の字をひらがな表記に変えることだけでも 20 年の歳月を費やしたという。

たった4文字、「ぬかびら」の字に変えるだけで 20 年も費やすという事は今回調査に行くまで想像もできなかった。何か変えるということは相当な労力が伴うのだというのを痛感した。

地域づくりにかける想いと夢の裏



和田 章人
地域経済学科2年
北海学園札幌高校出身

札幌から約3時間のところにある上士幌ぬかびら源泉郷に二泊三日の地域研修に行きました。ここではぬかびら源泉郷の地域づくりの担い手である三人から、出生から現在までの生活を聞くライフヒストリー法を用いて「なぜ地域の担い手になったのか」を調べました。

この調査を通してそれぞれに人生における重大な転換があったことが分かり、それは子の誕生による危機感や仕事の先輩の意思継承、そして、仲間との出会いでした。

そしてその背景にはぬかびら源泉郷にかける熱意や夢と地域住民の協力がありました。みんなが協力して一つの大型旅館のような結束が感じられた地域研修でした。お世話になった宿や周りの温泉宿の主人とお話をして分かりました。

担い手や地域住民の方々が地域づくりを楽しそうに日々過ごしている姿を生で見ると、私は地域づくりの素晴らしさと担い手の姿に感動しました。

大貝健二ゼミ I

参加学生数 12 人



大貝 健二
地域経済学科
准教授

別海町の地域産業、地域医療の現状と課題

研修地：別海町

研修目的

別海町は、人口16,000人、乳牛飼養頭数は120,000頭という、大規模農業地帯である。酪農を中心とした別海町の地域産業の現状を明らかにすること、これが目的の1点目である。また、広大な面積を誇る別海町での地域医療が抱えている問題を明らかにすることが目的の2点目である。

研修地・日程

- 8月19日 移動
野付半島視察・散策
町立別海病院ヒアリング（地域医療の問題）
- 8月20日 別海町酪農研修牧場視察
別海乳業興社ヒアリング
有限会社 デイリーサポート別海ヒアリング
株式会社 丸い佐藤海産ヒアリング
北海道中小企業家同友会別海支部の方々と懇親会
- 8月21日 水沼猛別海町長訪問
別海町役場にて研修報告会

写真キャプション

- ① 町立別海病院にてヒアリング。② ㈸デイリーサポート別海。③ 別海乳業興社。④ 別海酪農研修牧場。⑤ サケのフィレ加工の様子。⑥ 別海ジャンボグルメを堪能。



総括

研修を通じて明らかになったのは点、学んだ点は以下のとおりである。第1に、別海町の農業は、典型的な大規模農業である。近年はさらなる規模拡大を進めており、飼養頭数が数百頭程度のメガファームを超え、ギガファームが増加していることである。第2に、生産された生乳は大手乳業メーカーで加工されたのち、全国の市場へ移出される。そのため、別海町では加工・消費のリンケージが構築されないのだが、別海乳業興社によって「べつかいブランド」商品の開発、販売が進められており、少量でも地域内で消費しようとしていることが分かった。

第3に、とはいえ牛乳消費量は減少の一途をたどっており、牛乳の消費拡大を狙ったご当地グルメ、「別海ジャンボホタテバーガー」が誕生している。これは、域外からの観光客を呼び込むには一定の成果はあるが、他方で地域住民に対しては、「知ってはいるが、食したことがない」という傾向が顕著であり、いかにして町民に対しても消費を拡大させるかが課題である。

第4に、地域医療に関しては、自治体病院があることの意味、地域の活性化には生活基盤の安定、換言すれば地域の医療体制の充実による安心が不可欠であることを学んだ。

学生研修記

大学を飛び出して学ぶことの大切さ



平賀 颯人
地域経済学科2年
網走南ヶ丘高校出身

私たちは別海町を訪れ、名産物であるホタテ、牛乳を使ったジャンボホタテバーガーというB級グルメによる地域復興、医師不足や住民の高齢化を始めとする様々な問題を抱える地域医療などを学びました。今までは資料でしか触れてこなかったことを実際に現地へ赴くことで、その地域が抱えている本当の問題や、そこに住む人々の努力や苦悩を知ることができました。また、自分たちが感じたことをまとめ、人に伝える大変さも経験することができました。

今回の地域研修では大学を離れ、実際に現地に行き自分の目や肌で感じるからこそ本当に価値のあるものだと感じる事ができました。地域研修での3日間での新たな体験や出会いを無駄にしないよう、これからも活動の幅を広げていきたいです。

自分の可能性の発見



吉原 悠貴
地域経済学科2年
旭川東高校出身

「自分の可能性の発見」これが地域研修を通しての感想です。

私たちは、地域研修で別海町へ行き、そこで行った研修内容は、病院・酪農・水産関係の企業5社を訪問しヒアリング調査、住民や観光客に対するアンケート調査です。そして、夜には町長や商工会長さん、企業関係者の方々との懇親会。最終日には、別海町役場で地域研修を通しての報告会を行ってきました。研修内容自体は、体力的にもとてもハードで大変でした。しかし、その分、多くの人とかかわることができ、たくさん話を聞かせていただくことができました。

その中で、私が強く感じたのは「自分の可能性」についてです。大学生という限られた時間の中で何をするのか、どのように時間を過ごすのが。そして、多くの「自分の可能性」に気づきました。この地域研修での経験は、自分にとって大きな財産になったと確信しています。

大貝健二ゼミⅡ

参加学生数9人



大貝 健二

地域経済学科
准教授

課題先進地、高知県で「いなかビジネス」を考える

研修地：高知県梺原町・四万十町

研修目的

高知県は、「限界集落」という言葉が誕生した場所である。人口減少、高齢化、基幹産業の衰退などの問題が生じる中で、様々な「いなかビジネス」が危機感を持って生まれている。本研修では、それらの取組みの目的、現状を学ぶことを目的としている。

研修地・日程

9月10日	移動 梺原町農家民宿にて懇親会
9月11日	梺原町森林組合ヒアリング 四万十町へ移動 四万十楽舎にて愛媛大学と合同ゼミ実施 (2泊3日)
9月12日	合同研究発表会 ㈱とおわかみさん市ヒアリング ㈱四万十ドラマヒアリング 合同ゼミ「本当の地域活性化とは何か」
9月13日	最後の清流四万十川で川遊び、合同ゼミ解散 高知市へ移動 ひろめ市場で反省会
9月14日	桂浜散策 移動、解散

写真キャプション

- ① 梺原町・農家民宿。② 梺原町森林組合にて。
③ 四万十川と沈下橋。④ 小水力発電。⑤ 愛媛大との合同ゼミ。⑥ 地域活性化の提案。



総括

本研修で学んだことは、次の通りである。第1に、梺原町では、環境モデル都市として、自然エネルギーの地域循環を実践していることである。太陽光パネルの設置・普及や、地熱発電、水力発電に加え風力発電にも積極的に取り組んでおり、2050年までに自然エネルギー100%を目指している。規模が小さい街ならではの取組みであるといえる。

第2に、四万十町では、「いなかビジネス」を代表する㈱四万十ドラマと㈱十和おかみさん市のお話をうかがった。四万十ドラマは、「東京の豊かさと田舎の豊かさは異なる」として、四万十の「景色・ストーリー」を「商品」として売り込んでいる。おかみさん市では、十和地区のおかみさんが中心に緩やかな連携により農産物の直販所を道の駅に設置している他、農家レストラン、お総菜等の出張販売など多角的に展開しており、「生産者」と「消費者」が直接的につながることが、やりがいにつながっているとのことであった。

また、愛媛大との合同ゼミにより、「地域の活性化とは何か？」をテーマに、学んだこと、考えたことを基にディスカッションを実施したが、激論になるほどの盛り上がりを見せた。学生諸君にとって有意義な時間となった。

学生研修記

人が創り出す地域活性化

私たち大貝ゼミナールⅡは、自然エネルギーを利用した街づくりの視察・いなかビジネスの視察を行う為、4泊5日で高知県へ行ってきました。研修初日に訪れた梺原町では、2050年までに電力の100%を再生可能エネルギーで生み出すという目標を掲げ、行政のみならず地域住民が一体となって取り組んでいる姿がとても印象的でした。また、いなかビジネスの実態を自分の目で見ることによって、人の温かみや強さを実感することが出来ました。

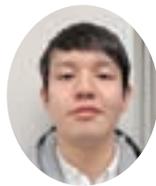
今回の研修で学んだことは、「地域活性化における人の重要度」です。地域の特性は様々ですが、結局地域を創り出しているのは「人」自身だということです。この4泊5日はとても内容の濃いものであり、刺激を受けるものが沢山ありました。今後は、自分の考える地域活性化を明確にし、今の自分に出来ることを精一杯行っていきたいと思います。

新しい地域の活性化とは

今回1日目に訪れた梺原町では、自然エネルギーを利用する事で、将来的に電力会社に頼らずにすべての電力を地域内で発電して利用する事を目標としており、住民が街灯にソーラーパネルを設置するといった活動を行なっているとのことでした。環境・電力問題に対して住民が目標や意識を共有し、共同で取り組むことでも地域は活性化する事が可能なのではないかと感じました。また、愛媛大と合同ゼミを行い、フィールドワークや、「これからの地域活性化とは」というテーマでグループディスカッション等の活動を行いました。今回の4泊5日間の研修を通じて、今までとは異なる、新たな地域活性化の方法を探っていくが必要になるのではないかと感じました。



内村 奈緒

地域経済学科3年
滝川高校出身

藤田 朋大

地域経済学科3年
札幌平岸高校出身

奥田仁ゼミ I・II

参加学生数 12 人



奥田 仁

地域経済学科
教授

歴史と文化の町の街づくり

研修地：江差町

研修目的

①北海道の歴史のルーツともいえる江差、上の国の歴史を知る。②訪問聞き取り調査を通じて江差町の歴まち商店街のユニークな街づくりの取組みを学び、③同時に、社会人としてのマナーや対話・聞き取りの力を身につける。④調査内容を取りまとめ、地域への提言を行う。⑤3日間の共同活動・生活を通じてゼミ生同士の相互理解を深める。

研修地・日程

- 9月10日 江差町役場、歴まち商店街役員らによる
レクチャー
歴まち商店街訪問聞き取り調査打ち合わせ
グループ個別調査
- 9月11日 歴まち商店街訪問聞き取り調査（2人1組、
6組計25軒）
夕食後報告会、役場商工観光課長、政策
推進係ほか職員、歴まち商店街役員ら
に調査報告を行い、討論。
- 9月12日 江差町内視察（旧中村屋、旧榎山蘭志郡
役所、道の駅江差、江差追分会館（江差
追分鑑賞）
上ノ国町勝山館跡見学

写真キャプション

- ① 江差町姥大神宮の見学。② 歴まち商店街パン屋さんでの聞き取り調査。③ 役場職員・商店街役員等に報告・討論。④ 報告会のあと役場課長さんの正調江差追分。⑤ 旧榎山蘭志郡役所にて。⑥ 勝山館ガイダンス施設で北海道史のルーツを学ぶ。



総括

上の国は松前藩の発祥の地であり、江差は松前藩の経済の中心地として北海道でもっとも古い歴史と伝統を誇り、また日本民謡の最高峰といわれる江差追分を伝え、全国から愛好家が集まる文化の町でもある。

しかし近年江差町でも人口減少と高齢化が進み、観光客入りこみ数も減少傾向にある。こうした中で江差町では歴史と伝統の町並みを生かした歴まち商店街の整備事業を行い、

百人の語り部、チンドン屋「夢作宣伝社」、江差・北前のひな語りなどさまざまな街づくり活動をおこなって、中小企業庁の「がんばる商店街77選」にも選ばれている。

研修では事前に江差の歴史と経済について学び、商店街の組合員全戸を手分けして訪問し聞き取り調査をおこなった。そして、これらの成果を町の方々に報告し、討論すると共に報告書を取りまとめ町の方々に送付、評価をお願いしている。

そこでは学生の立場から数多くの提言が出されたが、共通した感想は調査の過程で感じた町民の「暖かさ」であり、これこそが江差の宝だというものだった。このことは住民との「対話」を通じた地域研究という当初の目的が達成されたことの反映であると考えたい。

学生研修記

暖かい地域経済から学ぶ

今回の地域研修で私たちは3日間にわたって江差町を訪問しました。各グループに分かれて行った訪問アンケート調査では、地域住民の方々から江差町の魅力や町の活性化に重要なものといった生の声を聴き、現状や今後の課題を調査しました。そこで宿泊施設が少なく通過型観光になってしまっていることや若者の雇用が少なく若者不足だという問題が出てきた一方、お金は後からついてくると表現された方もいてとても印象に残っているのですが、全体的にそういった感情を大切にしている住民が多く感じました。それに訪問アンケートした住民全員が江差町にずっと住み続けたいと答えたことでより素敵な町であると感じたのと同時に地域を活性化させる力が十分にあると感じました。

実際に足を運ぶことで江差町のまちづくりを深く学ぶことができ、事前調査時よりも視野が広がり、大変充実した研修となりました。

江差の五月は江戸にもない

「江差の五月は江戸にもない」と詠われ、鯨漁をもとに交易港として栄えた江差町。屋敷や神社の景観など、古い建物や街並みがきれいに残されていることを実感しました。道指定有形文化財の横山家、旧中村家住宅、そして江差追分会館にも足を運び、重みある江差の歴史もしっかり学びました、歴史の深い街であると同時に、歴史が現在に溶け込んでいる街であることが印象的でした。そして街全体は、観光地と居住地が完全に別空間であるような大都市ではなく、むしろ観光地と居住地が一体化しています。数ある観光地のほとんどを歩いて巡ることができ、街全体が凝縮されている「コンパクトシティ」というものを経験できたと思います。これを活かして江差への観光客を増やす要因になり、「古き良き街」というだけではなく、新しいことにもチャレンジしている意欲的な街だ、という印象を受けました。



根田 康裕

地域経済学科2年
札幌平岸高校出身

曹 宸暉

地域経済学科3年
中国内モンゴル自治区出身

北倉公彦ゼミⅡ

参加学生数 22人



北倉 公彦

地域経済学科
教授

グリーンツーリズム・part 9 食と農のむすびつき

研修地：長沼町

研修目的

親子で経営されているリンゴ園とファームレストランが、どのようなむすびつきの下で展開されているか、体験型修学旅行が農家民宿でどのように行われているかを知る。

また、長沼町のグリーンツーリズムの一つのメニューであるそば打ちを体験するとともに、生産者と消費者が提携した農業であるCSAを知る。

研修地・日程

- 9月10日 ファームレストラン“ハーベスト”見学
仲野リンゴ園見学
道の駅“マイの丘公園”農産物直売所見学
農家民宿体験後の解散式(東京家政大学付属高校)見学
講演[長沼町のグリーンツーリズム事業]
農家民宿実施農家訪問・体験談を聞く
- 9月11日 そば打ち体験
福祉施設“リフレ”見学
CSA“メノビレッジ”見学

写真キャプション

① ファームレストラン“ハーベスト”。② 仲野さんからマサカリカボチャの話を聞く。③ 長沼町役場の皆さんと夕食会。④⑤ ソバ打ち体験。⑥ CSAのレイモンドさん夫妻。



総括

グリーンツーリズムは、北倉ゼミが地域研修の中で一貫して取り上げてきたテーマである。農村は食料生産の場だけではなく、生活の場であり、工夫次第では都市住民が訪れ、都会にはない楽しみを与える場となる。

それによって、食料と農業の距離を短縮し、農業や食料への理解を深めるとともに、農家にとっては副収入を得ることができる。

今回の研修では、グリーンツーリズムと農業の結びつき、全町的に展開されている農家民宿と体験型修学旅行の実施の現状について、多くの人の話から知ることができた。また、消費者が積極的に農業生産に参加することによって、生産者と消費者がウイン・ウインの関係を構築する新しい農業のやり方を学ぶことができた。

地域研修ⅠとⅡを継続して同じテーマで、同じ場所で実施することにより、学生は2回にわたり様々な知識と経験を得ることができる。今年は、北倉ゼミ最後の地域研修となったが、この10年ほどお世話になった長沼町の町長をはじめ、役場職員の皆様から感謝申し上げる。

学生研修記

地域で支えあう新しい農業“CSA”

今回の地域研修でも最も印象に残ったのはCSA“メノビレッジ”である。CSAとは、Community Supported Agricultureの略で、地域で支えあう農業と訳される。

メノビレッジは、1995年に札幌メノナイトキリスト教会の有志によってはじめられた。会員制をとり、農業生産のための経費は会員から毎年春に会費を集める。

今回訪れたCSAのレイモンド家では、札幌近郊の会員一軒ずつ野菜を届けているが、安全性には徹底しており、肥料も自分が飼っている鶏の糞を発酵させて使っている。長沼を選んだ理由としては、「農家の人たちが温かく歓迎してくれたから」といわれていた。

より身近に農業を感じ、誰がどのように作っているのかを知ることにより、安心し、また、信頼しあうことができ、安心して暮らしていくための農業があることを、初めて知ることができた。

ファームレストラン“ハーベスト”

今回、訪問したファームレストラン“ハーベスト”は、次に訪れた仲野リンゴ園の息子さんが経営している。実家でとれた果実や野菜の他、長沼産の農産物を食材にしたメニューを提供し、地元の人を雇用して、札幌を中心に年間数万人の人が訪れている。

オーナーの話の中で最も印象に残ったのは、「付加価値をつける」という言葉である。素材で販売するより、料理として提供すれば数倍の利益が自分のものとなる。また、このようなレストランが珍しい時代に始めたオーナーの先見性に敬服した。

レストランを始めた理由を、「自分が持っていた農業に対するマイナスイメージを変えたかった」としていたが、自分自身のビジョンを実現していく意志を感じることができた。どの職業に就きたいのか、どういう生き方をしたいのかと、迷っている自分の間に対する一つの答が得られたように思う。



高橋 菜

地域経済学科3年
栗山高校出身



松本 直之

地域経済学科3年
札幌藻岩高校出身



川村雅則ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数6人・5人(院生1人)



川村 雅則

経済学科
准教授川村ゼミ報告書
『学生アルバイト白書2012』

①学生アルバイトの実態、②学生・若者と労働組合

研修地：札幌市

研修目的

①学生アルバイトの仕事内容や労働条件などを明らかにするための調査を行った。昨年は聞き取り調査がメインだったが、今年はアンケートという手法を使って、実態をひろく明らかにするようつとめた。調査結果の読み方、原稿の執筆作業など四苦八苦しながら数ヶ月をかけて『白書』をまとめた。その過程で多くの力を身につけたと思われる。

②学生アルバイトにみられる問題状況を解決する上で、労働法や労働組合について学ぶことは欠かせない。そこで、労働組合の方々と交流(勉強合宿、組合行事への参加)を図り、労働組合にはどんな相談が寄せられ、どう解決を図っているのか、課題は何であるのかについて聞き取りを行い、『レポート』というかたちでまとめあげた。

研修地・日程

- 6月 本学の学生に対しアンケート調査票を配布・回収(学内で600枚を配布し、347枚を回収)
- 7~10月 アンケート調査結果の集計・分析
聞き取り調査の実施
『アルバイト白書』の作成
労働組合の方々勉強合宿
- 11月~12月 労働組合の定期大会に参加し、労働者組合員からの聞き取り調査と労働組合についての学習
『労働組合レポート』の作成



1



2

総括

①『学生アルバイト白書』は、学生のアルバイト実態を明らかにし、社会に出る前に、働く意義やルールを学生に考えてもらう教材とするために、作成した。

今年の白書では、職場環境や労働条件に疑問を抱きながらも、少なくない学生が労働法などの基本的知識を知らないという実態が見えてきた。アンケートでは、契約時に契約書などの書面で労働条件を提示された学生は6割にとどまり、4割が口頭による説明だけか、何の提示もされていない。このほかにも、労働基準法や労働契約法に抵触しかねない問題も、多々見られた。

学生アルバイトも労働者であり、労働法が適用される存在である。就職難の現在、各大学では就職活動のためのキャリア教育が盛んに行われているが、労働法や労働組合の意義などを学生に教える取り組みが必要である。

学生にとって、アルバイトはさまざまな効果をもたらし、成長にもつながる。一方、産業界にとって、学生アルバイトが基幹労働力となっている現実もある。かれらがその役割に応じた待遇を受けていない状況は、是正されるべきである。学生も、労働条件は一方的に決められるものではないと理解することが大事だと思う。(以上は『北海道新聞』へのコメントより)。

なお白書は以下で読むことができる。 <http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/~masanori/index>

学生研修記

アルバイトも労働者デアル

千葉 雅己
経済学科2年
石狩南高校出身

昨年のゼミでは、聞き取りを中心に本学の学生を対象としたアルバイト実態調査を行いました。調査では、賃金不払いや人手不足、過重労働といった経験をしていることが判明しました。昨年のこうした調査結果や経験を踏まえ、今年、私たちは、学生アルバイトの実態をひろく明らかにしようと、アンケート調査を行い、347名の学生から回答を得ました。

この調査で明らかになったのは、多くの学生たちが労働時間や賃金、人手不足などの点で苦勞しているほか、不要な弁償やパワーハラスメントといったトラブルを経験している学生も少なくないことでした。さらには、休憩が取れない、残業代がもらえないといった労働基準法に違反しているケースもみられました。

何故このようなことが起こってしまうのか。その原因の一つとしてワークルールに関する知識の無さが考えられます。アンケートの中で、ワークルールを知っていますかと尋ねたところ、約半数の学生が知らないと回答していました。また、ワークルールを知らなくて困ったことはあるかとの設問では、困ったことはないという9割の学生が回答していたものの、それは、そもそもルールを知らないために判断ができないという可能性も考えられます。

学生アルバイトも1人の労働者であって、労働者としての権利を持っています。学生たちもワークルールを身に付け、こうした問題に向き合っていくことが必要だと感じました。

アルバイト白書を作成して

八木橋 涼
経済学科3年
専修短大出身

現在、学生アルバイトは、さまざまな職場で欠かせない存在になっています。しかしながらアルバイトをめぐる問題は少なくありません。2011年にゼミで行ったアルバイト調査(聞き取り)では、レジの会計が合わなかったら担当者が自腹を切らなければならない、遅刻10分で5千円分の商品を買わなければいけないなど様々な問題が明らかになりました。今年は、アンケートという手法を用いて、こうした問題状況をひろく明らかにするようつとめました。

今回の調査で明らかになったのは、働きすぎで学業に支障が出ていることや、仕事内容や経験などが賃金に反映されず、低い賃金で働く学生が多かったことなどです。賃金への満足度も低かったです。また、ワークルールをあまり知らずに働いている学生も多く、トラブルに巻き込まれているということも明らかになりました。ただ、ワークルールに興味・関心を持つ学生が全体の7割を超えていたのは、救いでした。

今後の課題は、学生あるいは学生に限らずワークルールを社会全体にひろめていくことだと思います。今回の調査結果をもとに作成した『アルバイト白書2012』を多くの学生や社会人の方に読んでほしいと思います。



組合員のみなさんに混じって勉強



懇親会にも参加して聞き取り

②過重労働、パワハラそして過労死など、少なからぬ若者が就職後に深刻なトラブルに直面するといった事態をうけて、政府もワークルール教育の必要性を言い始めたのはよい傾向だ。しかしながら同時に、労働組合という存在あるいは労使関係という視点を学ぶことがワークルールに実効性をもたせる上で決定的に重要である。

そこで、労働組合についてより具体的に学ぶため、関係者からの聞き取り作業を行った。彼らが聞き取ったケースでも、例えば、◆正社員採用と書かれていた求人票をみて応募したものの、雇用契約書には「パート」（短時間労働者）と記載。納得できぬまま働き始めたものの最終的に解雇。労組に相談し会社と団体交渉の上、金銭解決を図る。◆50歳で定年で、しかも年俸が半額になると会社から通告。その後も会社で働き続けるがいじめ・パワハラを受け、労組に相談。裁判で争っている、など学生には信じられないようなトラブルが存在することや、そういうケースでも労働組合の協力を得ることで問題解決を図っていることが明らかになった。労働組合の意義や可能性を具体的に学ぶことができたのではないと思う。

学生研修記

地域研修を通して学んだこと



塚田 州彦
経済学科4年
滝川西高校出身

今回私たちは学生アルバイト調査を経て、労働者の権利を守るために札幌で活動している地域労働組合について学びました。具体的な活動内容としては、労働組合や地域労組について本で学んだり、労組の方々3名と9月に定山渓で勉強合宿を通して交流を深めました。そして11月には地域労働組合「結」を訪問し、労組で実際に活動をしている人々から聞き取り調査を行いました。

調査の中でわかったのは、労働組合の意義もさることながら、組合活動の大変さでした。会社側と交渉を続けることが負担となって、家族のために断念して引き下がらなければならない状況があることには驚きました。というのも、今までは、労働組合に入って腹をくくりさえすれば、不当労働行為は撤回させられると単純に考えていたからです。また地域労組は非常に注目を集めていますが、実際には、自分たちの問題が解決すればやめてしまうという、組合員の定着率の悪さや、組合財政基盤の弱さなども課題としてあげられました。次回調査を行う機会があれば、もっといろいろと話を聞いてみたいと思います。

最後に、今回の調査活動を通して、知識がないというのは本当に怖いことだと実感しました。いわゆるブラック企業の存在がマスコミでも指摘されていますが、就職をひかえる私たち学生も、困ったことに対応できるように学んでいくことが大切ではないかと思いました。

権利を守るために



松倉 寛
経済学科3年
札幌啓成高校出身

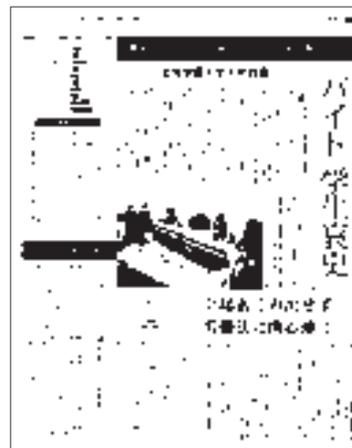
私たちは、学生アルバイトの実態調査活動に加えて、職場の問題解決を図るための手段として、労働組合について学びました。具体的には文献での勉強のほか、労働組合の方々との勉強合宿や、地域の労働組合を訪問し組合員の方々から聞き取り調査を行いました。

日本の多くの労働者が、職場の問題に悩み、将来に不安を感じながら働いていることが新聞等でも報じられています。労働者と経営者は、形の上では平等とされていますが、実際には働く側が弱い立場にあります。このために、労働者は団結し労働組合として発言していくことが必要だと思います。ちなみに私たちが交流した地域の労働組合は、ひとりでも入れる労働組合で、地域の労働者から数多くの相談をうけています。

会社の労働組合に加入すればよいのではという意見があるかもしれませんが、現実には労働組合のない会社が圧倒的です。しかも日本では、労働組合に相談することで出世に響いたり会社から嫌がらせを受けるといった実態もあるそうです。労働組合について学ぶまで、こうした事実を私たちはまったく知りませんでした。

学生にとって労働組合は、「まだ自分たちに関係ない」「難しそう」と感じるかもしれませんが、しかしながら、アルバイトで実際に様々な問題を経験していることは事実だし、将来就職してから職場を改善したり自分たちを守るためにも、労働組合の存在や機能を学ぶことは重要だと思いました。

●2012.10.31『北海道新聞』
「バイト学生実態/学生アルバイト白書」



●2012.11.5『北海道新聞』「学生バイトの実態 白書に」



写真キャプション

①～③ 合宿風景。④ 聞き取り。⑤ 組合の定期大会に参加。



3



4



5

小坂直人ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 36人



小坂 直人

経済学科
教授

帯広・十勝地域における自然エネルギー開発の取り組み

研修地：帯広市・鹿追町

研修目的

北海道は自然エネルギーの宝庫であると言説が盛んである。日本海側の風力、太平洋側の太陽光、酪農地帯のバイオエネルギーと森林地帯の木質バイオマスなど先進的な取り組みが各地でみられる。今回の地域研修は帯広・十勝の自然エネルギー開発を検証する。

研修地・日程

9月12日 帯広市屋台村
帯広市くりりんセンター
9月13日 鹿追町バイオガスプラント

総括

2011年3月11日は、「大きな地震・津波と深刻な原発事故」のあった日と記憶に留めるだけでは済まないようである。この震災と原発事故以降、自然エネルギーがブームとなっている。原発立地地域のみならず、全国、いや全世界において、原子力エネルギーの利用のありかたについて原点に返って考え直す気運が高まっている。原子力や化石エネルギーに全面的に頼ることのないソフト・エネルギー社会を構築することによって、根本的なシステム変換が求められているのが現在のわれわれの歴史的な立ち位置なのかもしれない。しかしながら、この道も容易であるわけではない。われわれは、北海道の自然エネルギー開発の動向を探るために、先進地域の一つ帯広・十勝地方を今年地域研修先とした。自然エネルギーは、その名の通り「自然条件」によって大きく結果が左右される。自然エネルギーの利点はその再生可能性にあるが、化石エネルギーなどに比べ、その密度の低さが弱点とされる。帯広・十勝地方はそのメリット・デメリットにどのように対応しようとしているのか、ささやかではあるが、着実な歩みを見ることができた研修であった。

学生研修記

バイオマス利用とまちづくり



長尾 将平

経済学科2年
北海学園札幌高校出身

鹿追町環境保全センターでは、バイオマス発電について学びました。化石燃料による環境問題が問われている現在において、このバイオマスは大気中の二酸化炭素を増加させないことから、今後は、もっと注目すべき資源、発電方式であると思いました。また、施設見学では、説明を受けながら各施設の働きや構造を学び、その規模の大きさに驚きました。さらに、原料となる家畜のふん尿のにおいがとても印象的でした。今回の研修を通して、バイオマス利用にあたっては、地域との結びつきが重要であることを改めて理解できました。鹿追町の場合、農業を中心とした地域産業や地域住民との関係があるからこそ、バイオマス利用が可能となっているのであり、地域に根差したまちづくりの大切さを強く感じました。今後も、地域の実態にじかに触れることを通じて、さまざまな地域づくりについての学習を深めたいと思いました。

ごみ発電の底力



山口 航平

経済学科2年
江別高校出身

今回、私たち小坂ゼミは、地域研修で帯広に行き、「くりりんセンター」を見学しました。「くりりんセンター」では、帯広市とその周辺地域からごみを集めていました。施設内では、クレーンを使いごみを焼却炉まで運ぶなど、徹底した機械化が行われていました。なかでも、焼却炉はコンピュータ制御システムによって24時間監視され、効率化が追求されており、さらに、焼却の際に発生する熱を利用して発電も行われているのには驚きました。また、センターでは、リサイクルも行われており、実際にセンター内には、壊れて捨てられていたギターを直したものが展示されていました。

センターを見学して、普段知ることのできないごみ処理の仕組みや新技術、そして徹底して追及されているリサイクル活動など、ごみを減らし、利用する帯広市の取り組みを学ぶことができ、自分たちも色々と考えさせられる機会となりました。

写真キャプション

① くりりんセンターでの事前学習。② 鹿追町環境保全センターでの事前学習を終えて。③ バイオプラント内。④ バイオプラントでの説明。⑤ 堆肥作り見学。⑥ 温室での説明。



小田清ゼミ I・II

参加学生数 30人



小田 清
地域経済学科
教授

地域循環型環境政策の取り組みに学ぶ

研修地：ニセコ町

研修目的

ニセコ町は、農業と観光が盛んな町として知られ、様々な「自然保護・保全条例」を制定している町でもある。

本研修は、ニセコ町が進めている産業振興と環境政策の実態を学び、今後の進路に役立てることを目的とした。

研修地・日程

- 8月7日 ニセコ町役場にて「ニセコ町循環型環境政策」についての講話を受ける
マイクロ水力発電・一般廃棄物処理場見学
- 8月8日 有島武郎記念館・ミルク工房見学・
尻別川ラフティング体験

写真キャプション

- ① ニセコ町・樋口係長と大野主任の講話。② 佐々木君の質問。
- ③ 農業用水路・マイクロ水力発電・らせん水車。④ リサイクル～完熟堆肥。⑤ 有島記念館。⑥ ラフティング体験。



総括

「狩太・かりぶと」(現ニセコ町)に人が定住するようになったのは、明治27～28年頃のことである。開拓時の生活は貧しかったが、明治37年に鉄道が開通すると農業と並んで商業も盛んになりました。昭和38年、ニセコ連峰が国立公園に指定されると、「狩太町」の美しい風景が全国に知れ渡り、観光産業が発展し、他の産業も連動して進展してきました。

昭和39年、農業と観光を中心としたまちづくりを目指して、町名をニセコ町と改めました。また、平成13年には「ニセコ町まちづくり基本条例」を全国で初めて制定しました。その後、ニセコの美しい自然環境を守るために「環境基本条例」「景観条例」「地下水保全条例」「水道水源保護条例」などを矢継ぎ早に制定し、CO₂削減のために小水力発電の普及にも努めている。

私たちは、このニセコ町の環境・エネルギー政策の実態を学ぶために本研修を企画した。ニセコ町企画環境課・環境エネルギー係の皆さんには講話から現地案内等まで、大変お世話になりました。日常的には新聞紙上等でしか拝見することの出来ない環境・エネルギー政策の実態を、肌で感じる事が出来たことは大変貴重な経験になったのではないかと思います。

学生研修記

環境に配慮したまちづくりを学んで



岩本 泰輔

地域経済学科2年
北海道出身

今回の地域研修では、ニセコ町で「環境とエネルギーに配慮してのまちづくり」について学びました。ニセコ町役場企画環境課・環境エネルギー係の方からマイクロ水車(上掛式と螺旋式)での発電とそれによって水力発電を実践に移していくということなど、ニセコ町の様々な取り組みを知ることができました。また、一般廃棄物最終処理場では埋め立てた廃棄物などが、雨や風によって流れたり飛んだりしないようにするなど、環境に優しい生活がおくれるように様々な工夫がなされていました

2日目に訪れた有島武郎記念館では、ニセコ町で生まれ育った小説家の生い立ちや作品などに触れることができ、大変に印象深かったことが思い出されます。

今回の研修を通して、ニセコ町が目指す環境に配慮したまちづくりの取り組みについて学ぶことができ、またゼミ生間での交流を深めることもできたので、大変充実した研修になりました。

国際環境リゾート地としての発展



二階堂 真元

地域経済学科3年
北海道出身

私たちは今回の研修で、ニセコ町のまちづくりについて学んできました。ニセコ町が町づくりをする上で特に重要視していたのは環境保全です。その環境保全の具体的な取り組みとして、ニセコ町内の各地に点在する小水力発電を実際に見て回りました。ニセコ町で行われている再生可能エネルギーの生産は、民間企業中心の開発形式ではなく自治体を中心となっていく行なわれ、その成果は地域内で循環する仕組みになっている。その電力の「地産地消」ともいえる取り組みは、地域の活性化に大きく貢献すると思いました。

研修日最後の午後からは尻別川でラフティングを体験し、ニセコ町の豊かな自然を肌で感じてきました。そして、その豊かな自然は観光資源として、人を魅了する力を持っている重要な資源であると感じました。その重要な資源を活用するためには、単に国際的なリゾート地として開発を進めるのではなく、環境保全も同時並行的に行うことが必要であり、その並立した取り組みによって、ニセコ町はより多くの人を魅了する「国際環境リゾート地」として成長することができると感じました。



佐藤信ゼミ I・II

参加学生数 25 人



佐藤 信

地域経済学科
教授

北海道における発電所の状況と電力需給のあり方

研修地：厚真町・苫小牧市・伊達市

研修目的

本研修では、北海道の電力需給の実態を知るために、中心となる二つの火力発電所と自家発電を行っている王子製紙苫小牧工場、伊達ソーラー発電所の現状を学ぶことを課題とした。

研修地・日程

8月7日 北電苫東厚真発電所
王子製紙苫小牧工場
8月8日 伊達火力発電所

総括

2012年の夏は、北海道でも計画停電の実施を予定するなど電力需給への関心が大きく高まった時期であった。こうした中で、本ゼミでは、北海道の主力発電施設である厚真と伊達の火力発電所の視察を行ない、今後の電力供給のあり方を考える機会を得ることとした。厚真火力発電所では、ちょうど4号機の定期点検中であり、10月の再稼働に向けての考えを訊くことができた。現場レベルでは、泊原発が再稼働しなくとも、秋からの十分な電力供給が可能であるとのことであった。次の王子製紙苫小牧工場での視察では、安全面への配慮もあり、工場内は撮影禁止とのことであったが、最新鋭の製紙機械やリサイクル施設を見学することができ、また特別に資料提供を受けるなど配慮して頂いた。

伊達火力発電所では、主にソーラー発電の状況について学ぶことができた。ソーラー発電は道内各地で建設が進められているものの、天候のわずかな変化によって、発電量が大きく変化する。積雪対策やコスト、蓄電方法の確立などがこれからの課題であることが分かった。ゼミ I・II との合同研修であったが、学生たちは学年を超えて協力し合い、また現場で働く様々な人々と接し、良い体験ができたと思う。

学生研修記

研修を通して見えた課題



中島 なつみ

地域経済学科2年
北海学園札幌高校出身

私たち佐藤ゼミは、2、3年生合同で厚真町、苫小牧市と伊達市を訪れました。1日目に訪問した北電苫東厚真発電所では、火力発電の機構の説明を発電所内のタービンなど見つ受け、発電までの流れを学びました。2日目には伊達火力発電所のソーラー発電所へ行き、ここでも概要や説明、建設の背景などを伺いました。発電所2つを回って思ったことは、北海道の電力供給は思っていたより安定しているということです。私たちが伺ったときは泊原発や伊達の発電量が大きい4号機が停止中でしたが、他の発電所が稼働したため電力供給量は変わらなかったのです。しかし、資源の無い日本がこれから先も同じように火力に頼ってはいけないとも感じました。火力に6割頼るとするのはバランスが悪く、まだまだ発展途上の自然エネルギーを取り入れ、改良していくことによって更なる安定を目指すべきだと思います。

発電所を実際に見学して



藤原 大樹

地域経済学科3年
名寄高校出身

佐藤ゼミナールでは、8月の暑い中、二日間の地域研修に臨みました。北電苫東厚真発電所では広大な工場内を実際に歩き、稼働しているタービンや発電機をととも近くで見学できました。王子製紙苫小牧工場では工場の歴史や現状についての話を聞き、実際に工場では古紙が運ばれていく工程を見学させていただきました。そして伊達火力発電所ではソーラーパネルを用いた発電設備を触ることができ、また大量に並べられたソーラーパネルの数に驚きました。

今回の地域研修で発電用の設備を実際に見学できたことは、発電の仕組みを理解するうえで大きな経験になったと思います。今年は、特に、電力供給が逼迫すると懸念されている状況ではあるものの、各見学先の発電所が、家庭に電力を供給できるよう一生懸命努力しているということが、見学を通して感じることができました。

写真キャプション

① 安全のためヘルメットを着用（苫東厚真発電所）。② 厚真火力発電所の構内視察。③ 定期点検中の厚真火力発電所4号機。④ 伊達発電所での聞き取り。⑤ ソーラーパネル（伊達ソーラー発電所）。⑥ ソーラーパネルの温度を触って確認。



徐涛ゼミ I・II

参加学生数 15人



徐 涛
地域経済学科
教授

中国人観光客についての調査

研修地：釧路市

研修目的

2008年末に中国で「非誠勿擾」（「狙った恋の落とし方」）が公開され、ロケ地の釧路の人氣が急上昇し、中国人観光客が2007年の1,000人程度から2009年の12,700人に大幅に増えた。

ロケ地効果が続いているのか、経済効果を拡大させるにはどのような対策が必要なのかを調べた。

研修地・日程

- 10月2日 釧路市役所訪問
釧路市内でアンケート調査
- 10月3日 摩周湖でアンケート調査
阿寒湖温泉街
- 10月4日 阿寒湖でアンケート調査

写真キャプション

- ① 釧路市観光振興室渡部港吾さん、端役出演した「非誠勿擾」の秘話を披露！
- ② 釧路市役所研修。
- ③ いざ調査開始！
- ④ 「非誠勿擾」のロケ地「浜っ子」（「四姉妹」）。
- ⑤ 中国人観光客。
- ⑥ あ～疲れた！



総 括

中国人訪日客や来道客について、今までは白書、記事、公表データを通じて勉強し、昨年は北海道チャイナワークの張相律社長に現状を紹介していただいた。

今回は一歩進んで釧路に行き、釧路市観光振興担当の方からお話を伺い、中国本土・台湾・香港などからの観光客に対してアンケート調査を実施した。

釧路に行く前に、学生たちが自ら観光庁や道庁の調査報告書を参考にして、調査目的を確認した上で、観光アンケート票を作成し、現地調査スケジュールを建てた。

語学の壁や調査環境の悪化など様々な心配を抱えながら、調査が始まった。外国人観光客がとても友好的にアンケートに答えてくれたので、学生たちも漸次に外国人観光客に積極的に声をかけられるようになった。その結果、70以上のアンケート表が回収できた。研修を通じてチャレンジ精神を修得したことは予想外の一大成果であった。

しかし、サンプルの地域分布をみると、残念ながら、台湾が過半数を占めており、中国本土は少ない。それでも、調査から、例えば、観光客数が増える反面、経済効果が十分に拡大していないなど、釧路市観光振興の課題が見えてきた。

学 生 研 修 記

「非誠勿擾」のロケ地へ行ってきました！



竹本 貴昭
経済学科2年
北広島高校出身

2008年に中国で上映され、大ヒットした映画のロケ地となった釧路に、多くの中国人観光客が訪れた。ロケ地効果は現在も続いているのかを調査するために、釧路市に赴きました。

調査では、釧路市役所の渡部さんから釧路市における中国人観光客のお話をお聞きし、摩周湖や阿寒湖では釧路市役所の協力を得て、70人以上の中国・香港・台湾からの観光客に対してアンケート調査を行いました。

釧路や北海道の持つブランド力は、中国・香港・台湾からの観光客にとって非常に高い。その一方で、今秋以降中国人観光客が減少していることを、身を以て感じました。

今回の研修では、調査時間外ではボーリングをしたり、スパカツを食べに行ったりなどして、ゼミ生の仲が深まりました。

地域研修で本当に学ぶ事とは!?



吉田 紘樹
地域経済学科3年
双葉高校出身

今回の地域研修では、前年度からのテーマである中国人観光客について、中国で大ヒットした「非誠勿擾」のロケ地、釧路でアンケート調査を行いました。

今回は私たちゼミナールIIを中心に、ルート・タイムラインの作成やホテルの予約など多くの事で自主的に準備を実施しました。

ご存じの通り、今年は尖閣諸島の問題があり中国人観光客が少なく、そのような中でのアンケート調査は非常に大変でした。しかし、それぞれに与えられた役割の中、全員が協力し積極的に調査を行う事で、十分とまではいきませんでしたが、非常に貴重なデータを採ることができました。

満足いく成果はあげられたとはいきませんが、今回の経験を通し、ゼミ生全員が役割を果たす責任感、困難なことに立ち向かうチャレンジ精神を身につけられ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。



高原一隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 25人



高原 一隆
地域経済学科
教授

食のB級グルメによる地域活性化の現状と課題

研修地：富良野市・帯広市

研修目的

ブランド力をもっていた富良野観光は大きな転機を迎えている。地域ブランド力を新たに生み出そうとする活動の一つとして食のB級グルメ富良野オムカレーがある。その現状と効果をアンケートやヒアリングを通じて明らかにする。

研修地・日程

- 8月27日 富良野市役所でのレクチャー（商工観光課、農林課）
市内オムカレー店でのヒアリング
- 8月28日 フラノマルシェ、ふらのワイン工場、富良野チーズ工房
JAふらの（たまねぎ選果場）
農家（酪農、野菜）
アンケート活動
- 8月29日 アンケート
JAふらの（人参選果場）
- 8月30日 北の企業協同組合（いわゆる北の屋台）
理事からのレクチャー

写真キャプション

- ① 昼食「富良野オムカレー」。② ワイン工場見学。③ チーズ工房見学。④ 牧場でのヒアリング。⑤ ゆうふれの里でのヒアリング。⑥ 玉ねぎ選果場でのヒアリング。



総括

ある調査によると、富良野市の地域ブランド度は全国6位に位置する。しかし、スキーブームが終焉し、ドラマ『北の国から』も終わるなどブランド観光地としての大きな転機を迎えている。それに代わりうるものとして食のB級グルメの活動がすすめられている。

研修はその実態を明らかにするため、各団体やアンケートを通じて明らかにすることを目的とした。様々な団体へのヒアリングを通じてオムカレー店や関連団体の活発な動きが明らかになった。市民向けと観光客向けそれぞれのアンケートを通じて、富良野オムカレーの存在が知られつつあることがわかった。

同時に、市民のほとんどにはその名が知られてきているが、市民生活には必ずしも浸透していないこと、観光客には知られていてもそれをB級グルメとして必ず食べているわけではない実態が明らかになった。真の地域ブランドにしていくためには、市民生活への浸透と観光資源の両面からの活動と対策が求められている。

学生研修記

食による地域おこしについて

私達は、ご当地グルメによる地域おこしについて調査を行う為、富良野へ行きました。

富良野には、富良野オムカレーという地産地消にこだわりを持ち、行政予算「0」で始まったご当地グルメがあります。昨年度までに35万食以上提供されていますが、アンケートの結果、地元市民の約4割は食べていないという事がわかりました。これから多くの観光客に食べてもらうためにも、地元市民が観光客にオススメできるようになることが鍵になると思うので、まずは地元市民に根付く必要があると思います。

北の屋台の調査の為に、帯広市にも行きました。

実際に北の屋台にも行き、そこで出会った人から話を聞いた事は、今までの自分を見直す良いきっかけになりました。

今回の地域研修で私自身、勉強不足だと感じたので、来年の地域研修は、本を読むなどして、色々な事を学んでから臨みたいと思います。

富良野市とオムカレーの未来

ゼミのテーマは「食のブランド化による地域活性化」。私達はご当地グルメ「富良野オムカレー」を調査するため、富良野市を訪れました。オムカレーとは地元野菜を使える「カレー」にインパクトのある「オム」を乗せたB級グルメ。「景観」や「北の国から」に変わる新たな観光の目玉として、オムカレーをPRしています。

現地では市役所や産業団体でのヒアリングと市民や観光客、オムカレー販売店舗へのアンケートを行いました。オムカレーを推進する団体の不断努力により観光客、市民ともに一定に認知度がある一方、食べたことのない市民が多いことがわかりました。B級グルメとしてさらなる発展をするには市民が良さを知り、主体的にPR指定することが必要。地域に根ざした家庭の味となるようなこの後の取組が鍵になってくると思います。



小玉 淳史

地域経済学科2年
岩内高校出身



中野 良美

地域経済学科3年
北海学園札幌高校出身



西村宣彦ゼミ I・II

参加学生数 27人



西村 宣彦

地域経済学科
准教授

財政再生団体・夕張市、地域再生への挑戦

研修地：夕張市

研修目的

財政再建団体に移行して6年目となる夕張市の現状を見、破綻したマチの再生に取り組む人々の生の声を聴くことを通じて、「地域の再生とは何か?」「夕張は再生できるのか?再生に向けた課題は何か?」を考え、自分たちなりの答えを出すことが研修の目的である。

研修地・日程

- 8月27日 鈴木直道夕張市長
細川孝司夕張市建設課長、市営住宅視察
佐藤真奈美炭鉱の記憶推進事業団研究員
と旧北炭清水炭鉱ズリ山登山、連風
アーティストとの交流
黒澤久司夕張市農協営農部長、農家訪問
(後藤敏一さん)
増川博美北海道・夕張倶楽部副理事長、
夕張鹿鳴館見学
反省ミーティング
- 8月28日 自治班…寺江和俊夕張市出納室長、村
井啓祐夕張市職労書記長、北山氏(浜松
市派遣職員)、厚谷司市議、熊谷桂子市
議ヒアリング
観光班…澤田直矢ゆうばり国際映画祭
ディレクター、本田靖人夕張桜守代表、
若狭翁奇(「メロン熊」開発者)ヒアリング
誘致・移住班…木村卓也夕張市産業課長、
西村昌弘夕張ツムラ社長、橋場英和「バ
リー屋台」社長、石谷元晴・和歌子夫妻
(Yubari Mountain Freaks主宰)ヒア
リング
高齢者班…菅野義則夕張市社会福祉協
議会主査、南部ふれあいサロンにお集
まりの高齢者の皆様、鳴海重雄清光園施設
長、三島京子介護支援専門員ヒアリング
終了後、アディーレ会館前でBBQ(ご
協力：ネクスト夕張)
- 8月29日 反省ミーティング
夕張市石炭博物館見学
ラフティング体験(ゆうばり自然体験塾、
鶴川)

写真キャプション

- ① 屋台村「バリー屋台」見学&ヒアリング。②
南部ふれあいサロンで高齢者とランチ交流。③「
夕張ツムラ」工場見学&ヒアリング。④ 鈴木直道
市長を囲んで(岩手県立大学と合同)。



総括

初日は、最初に全国最年少市長である鈴木直道氏から話を聞き、続いて市が「コンパクトシティ化」の一環で整備した新しい市営住宅を視察した。午後は炭鉱の記憶推進事業団の佐藤真奈美氏のガイドで旧炭鉱のズリ山に登り、産炭地域の歴史を学ぶとともに、東京都の夕張支援事業の一環で来夕中の連風アーティストの皆さんと交流した。次に夕張市農協でメロン産業の現状と課題を聞き、近隣メロン農家を訪問した。最後に国の有形文化財に指定された「夕張鹿鳴館」を見学し、同施設でフレンチシェフを務める増川氏に夕張の魅力や今後の事業展開を伺った。2日目は、夕張再生の現状と課題を知り、夕張の可能性を探るという観点から、「自治」「観光」「誘致・移住」「高齢者」の4班に分かれて、各班毎に4箇所程度を(学生が主体となって)訪問してヒアリングを行った。各班のヒアリングを通じて、財政破綻した自治体ゆえの厳しさが依然として残るが、夕張再生のために前向きに頑張っている人たちも数多くいて、夕張には人や企業を惹き付ける独特の魅力があることもわかった。夕張再生のために前向きに頑張る多様な立場の人たちの思いに学生らも刺激を受け、マスコミによるステレオタイプな暗いイメージを覆されたようであった。大所帯の訪問を快く受け入れていただいた関係各位に、心から感謝申し上げたい。

学生研修記

生き生きとしていた夕張。さらなる情報発信を

地域研修に行く前の夕張のイメージは、財政破綻し活気のないマチというものでしたが、私がお会いした夕張市民の皆さんは皆、前向きに強い意志を持ってまちづくり活動に取り組んでいて、実際の夕張は生き生きとして見えました。市民がここまで真剣にマチのことを考えているマチは他になかなかない、人と人とのつながりも強く、地域の総合力・団結力は決して弱くないマチだと感じました。ゆうばり国際映画祭や桜祭りなど、観光、自治、その他の分野で、夕張の再生を目指して様々な活動が行われていますが、知名度の低さが課題であると思いました。なぜなら私も実際に夕張を訪れて話を伺うまで、夕張でどのような活動が行われているか知らなかったからです。もっと様々な媒体を使って、活動内容をアピールし、広く知ってもらうことが、今後の夕張に必要なことではないかと思いました。

「財政再建」だけではなく「地域の再生」が何よりも重要

私たちは2006年に財政破綻した夕張市に行きました。1日目は、鈴木直道市長から話を伺うことができました。市長は夕張の負の遺産ともいえる石炭を使って、夕張を再活性化しようと考えていることを知りました。2日目は、自治、観光、誘致・移住、高齢者の4つに分かれてグループ研修を行いました。私は自治グループで、市役所で2名の市議、3名の市職員の方から、夕張が財政破綻した経緯や現在直面している様々な問題について話を伺いました。今回の研修では「夕張の再生とは何か」を考えるというのがテーマでしたが、多くの人から話を聞き、実際に夕張市の現状を見て、夕張の再生とは財政再建も重要であるが、地域を再生することが何よりも重要であるという結論に至りました。研修を通して、現地の人々の話を聞かなければわからないことをたくさん知ることができ、とても充実した地域研修になりました。



高野 詩菜

地域経済学科2年
大森高校出身

大宮 遼託

地域経済学科3年
芦別高校出身

平野研ゼミ I

参加学生数3人



平野 研

地域経済学科
准教授

札幌市におけるフェアトレード活動の実態と課題

研修地：札幌市

研修目的

フェアトレード活動を通じて、途上国の抱える問題を認識すると同時に、経済活動により国際貢献を行う新たな開発モデルについて考えていく。また、市民活動への参加によって組織運営やフェアトレードの課題について自ら気づき、考察していく機会として行くことが、研修の目的である。

研修地・日程

「フェアトレードフェスタ2012 in さっぽろ」
札幌市大通公園1丁目
6月30日 カンガ（アフリカ伝統衣装）ファッションショー企画
7月1日 普段着ファッションショー企画

本学「十月祭」
10月6-8日 十月祭（学祭）フェアトレードカフェ出店

総括

新たな国際貢献として注目されるフェアトレード（以下F T）活動が札幌の市民運動でいかに取り組まれているかを、「フェアトレードフェスタ2012 in さっぽろ」への実行委員として実践的に学んだ。事前学習でF T活動の歴史、理念について学んだ上で、市民活動に参加することは、F Tの意義を体感するとともに、市民運動の実践の難しさ、認知度を上げることの難しさなどの課題の気づきへと結びついた。

上記フェスタにおいて、2部ゼミ I の学生とともにステージ班として参加した。アフリカ伝統衣装を使ったファッションショーや、F T衣料品を普段着に取り入れたショーを企画し、成功させた。ステージライブでは、出演者の調整、機材の確保に至るまで、準備を入念に行った。そのような中、市民運動がボランティア中心であることによって、構成メンバーの特定が困難で、意思決定過程が不明瞭で遅延しがちであるなどの問題を認識した。さらに活動の継続性、情報の共有化の重要性など市民運動組織化における課題を事後の議論で導き出した。

このような経験を生かし、本学大学祭「十月祭」へF Tカフェを出店した。F T認知度を上げるためには、単なる商品販売だけではなく、生産者の顔の見える取り組みが重要である、と実行委員活動を通じて学んだが、この点に関して学祭出店では十分に実現できなかった。

このように、積極的主体的に市民運動に参加することによって、実践的に意義と課題を認識する経験は、今後の学習においても良い機会になったといえる。

学生研修記

「フェアトレードを知っていますか？」

地域研修ではフェアトレードフェスタというフェアトレード普及のためのイベントに実行委員として参加しました。主にステージを担当し、ステージではライブやファッションショーを行いました。自分たちで一から企画しました。フェアトレードという活動の認知度の低さのせいも、市民だけの力で大きいイベントを行うのはとても大変で、日本でフェアトレードを普及させていく道りはまだまだ長いと感じました。

また、十月祭ではフェアトレード商品の販売を行いました。自分自身でフェアトレード商品を販売してみることで、フェアトレードという付加価値を伝える難しさや多少高くなる価格面などフェアトレード商品を販売する難しさを実感しました。

このように2つのイベントに関わっていく中で世界で活動している方や他大学の学生など多くの人と知り合い、フェアトレードや発展途上国について学びました。

「地域研修を終えて」

平野ゼミ I では地域研修でフェアトレードフェスタに実行委員として参加し、企画運営など慣れない仕事を任せられました。最初は何をやってよいか分からない状態で、戸惑いながらの仕事でした。開催日が近づくにつれ熱も入り、毎日いろんな人に電話をしたり、ワークショップに参加するなど忙しい日々でしたが、無事に成功させることが出来ました。実行委員になることでフェアトレード活動をしている人のお話などを聞くことができたり、社会人の方々と一緒に活動することはとても良い経験になりました。

またフェスタのほかに10月祭でフェアトレードのドーナツなどを販売しました。これらの活動で改めて、フェアトレードを深く学び、フェアトレードを普及させることの難しさやなどを感じました。そしてこれからもフェアトレードを広めていける活動をしていきたいと思いました。



畠山 拓武

経済学科2年
北見北斗高校出身

池原 誉人

地域経済学科2年
帯広緑陽高校出身

写真キャプション

① ステージ企画打ち合わせ。② 全国のフェアトレード団体が出店。③ カンガ（アフリカ伝統衣装）ファッションショー。④ ステージ上のライブ演奏。

古林英一ゼミ I

参加学生数 12 人



古林 英一

地域経済学科
教授

サケを中心とする地域産業の形成

研修地：標津町

研修目的

サケは北海道の水産業にとって最も重要な魚種である。単に漁獲量が大きだけでなく、水産加工業が幅広く成立しているため、産業としての広がりが大きい。このサケのふ化・放流から漁獲・加工・流通までを実際に体験することでサケ産業を理解することが目的である。

研修地・日程

10月25日 移動
10月26日 水産加工場見学
講義「標津町の消費流通対策」(標津町 中村敏明氏)
人工授精等の実習
10月27日 さけ定置漁業の乗船実習

写真キャプション

- 1 加工場の入り口。
- 2 ③ イクラ製造のようす。
- 3 ④ サケの解剖実習。
- 4 ⑤ サケ定置漁業の乗船実習。
- 5 ⑥ サケの水揚げ。



総括

サケ漁業は「つくる漁業」の優等生ともいわれ、人工授精からはじまり、安定した漁獲量を維持し続けている。また、標津町ではかつて近隣の水産加工場で発生したO157事件を契機として、漁獲から加工・輸送に至るまでの衛生管理を地域ぐるみでおこなう地域HACCPを導入し、高品質のサケを供給することで競争力をつけようとしている。

さらに近年では消費地・消費者と直接取引をおこなうというマーケティングチャンネルの改革にも乗り出している。

本研修ではふだん深く意識することなく消費しているサケの加工・流通の現場を実際に体験することで、水産業を単なる知識ではなく実体的に理解することができたと思われる。

学生研修記

標津町で学んだサケ漁業



平原 凜太郎
地域経済学科2年
札幌西陵高校出身

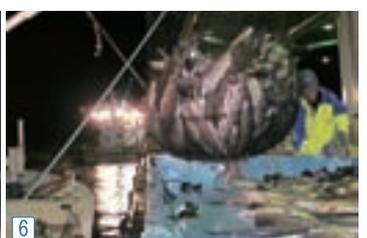
今回私たちは地域研修で道東にある標津町に行きました。標津町では「サーモン科学館」で、サケ漁業についての講義と人工授精体験をさせていただきました。講義の中で特に関心を持ったのが「地域 HACCP」についてでした。「地域 HACCP」はサケを漁獲してから加工・輸送するまでの間に徹底した衛生管理などを行い、消費者に安全な食品を届けるための取り組みでのことで、イクラの加工見学で実際に私たちが行った神内商店さんでも、厳しい衛生管理の様子を見ることができました。そして、人工授精体験では、用意されたサケを撲殺するところから始まり、卵を取り出して重さを量り、精子を卵にかけて授精させるまでの工程を実際に体験しました。また、最後の日には地元の漁師さんに漁船に乗せてもらい、サケの定置網漁を間近で見学させていただき、今回の研修はとてもいい経験になりました。

タイトル 地域研修を終えて

私たちは、今回標津町で地域研修を行いました。標津町とは漁業で有名な所であり、特にサケ漁は日本でも高い水揚げ量を誇っています。今回はそのサケについて様々なことを学びに行きました。標津町は消費者に「安心・安全」を届けるという地域HACCPを地域ぐるみで導入しており、加工工場での見学と、サケの定置網漁業の乗船実習を通して、徹底された鮮度管理と衛生管理を見て、この毎日の努力が「安心・安全」という評価を生んでいるのだと思いました。そして、サーモン科学館では「サケの流通と販売戦略」・「サケの生態」の講義を受け、サケについてより深い知識を身に付けることができました。また、サケの人工授精体験もさせていただきました。それは撲殺したサケから卵を取り出し、精子をかけて授精させるというものでした。そこで私たちは生命の重さと大切さを実感しました。



平口 涼介
地域経済学科4年
伊達緑丘高校出身



古林英一ゼミⅡ

参加学生数 8人



古林 英一

地域経済学科
教授

軽種馬の生産・育成・流通および利用

研修地：新ひだか町・様似町・浦河町・日高町

研修目的

サラブレッドの生産・育成は北海道日高地区の基幹的な地場産業である。本研修においてはサラブレッドの生産・育成・流通の諸段階を体験・見学し、当該産業の理解を深めることを目的とする。

研修地・日程

- 9月12日 日本軽種馬協会北海道市場で馬の生産・流通に関するレクチャーと市場施設の見学
ライディングヒルズ静内(新ひだか町)で乗馬実習
- 9月13日 日本中央競馬会日高育成牧場(浦河町)で馬の育成に関するレクチャーと施設見学
高村牧場で牧場作業の体験実習(様似町)
門別競馬場(日高町)でレースおよび施設見学

写真キャプション

- ① 北海道市場。② セリ場。③ 乗馬実習。④ 研修(日高育成牧場)。⑤ 牧場での作業体験。⑥ 牧場風景。



総括

わが国は世界有数のサラブレッド生産大国であり、日高地方はわが国のサラブレッド生産の中心となっている。今回の実習では市場施設の見学とサラブレッド生産のレクチャーを受けた。その後、乗馬施設において乗馬実習おこなった。日本中央競馬会日高育成牧場で、サラブレッドの育成に関するレクチャーを受けた後、高度な科学的育成の現場を見学した。わが国のサラブレッド生産は家族労作的な牧場が中心となっている。様似町の高村牧場でサラブレッドの日常的な飼養管理を実際に体験した。最後に門別競馬場で開催中の道営ホッカイドウ競馬のレースと施設の見学をおこなった。

馬に初めて触れた学生がほとんどであり、本研修を通じて、華やかな競馬場でのレースを支えるために、数多くの人たちの多大な労働が投入されており、それらが地域産業として成立していることを理解できたと思われる。

学生研修記

競走馬の流通・生産



長居 聡

地域経済学科3年
苫小牧東高校出身

私達古林ゼミ隊では、馬産地で有名な日高支庁を訪れました。1日目は、実際に競走馬のセリ場を見学し、セリの仕組みや施設の説明を受けました。次に、ライディングヒルズ静内では、乗馬を体験し、馬に乗ることの楽しさを実感しました。2日目は、JRA日高育成牧場で競走馬や繁殖牝馬について学びました。特に参考になったのは、馬の分娩についてです。馬の出産は真夜中から早朝に生まれる場合が多いため、職員への負担も大きいものでした。しかし現在では、過去のデータや馬の体温から時期を予測し、スムーズに行えるようになりました。次に、高村牧場にて馬小屋の掃除をして、馬を育てることの難しさを実際に体験しました。最後に、門別競馬場で競馬を見学しました。普段見れない競馬場の裏側を知りました。この2日間で競走馬の一生に触れた研修ができ、非常に充実した内容でした。

地域産業としてのサラブレッド

今回の研修ではサラブレッドの生産・育成・流通のサイクルを学びました。競馬についてはある程度知っていたが、レースで走る前のサイクルを学ぶことが出来たので有意義な研修になりました。今回の研修で最も驚いたことは日本中央競馬会日高育成牧場の敷地の広さです。そこでは育成に関する講義を受け、実際に調教の様子を見ることが出来ました。“世界で勝てる”サラブレッドがこの牧場や日高から出てくることに期待したいです。家族労作が中心となる日本のサラブレッド生産が容易ではないことを高村牧場での体験で感じました。馬房の清掃と馬の移動だけでも大変な作業でした。

サラブレッドは日高地方の経済にとって重要な存在であり、サラブレッド産業の今後さらなる発展が必要となると今回の研修で感じました。



岩淵 奨平

地域経済学科3年
旭川南高校出身

水野邦彦ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 16人



水野 邦彦

地域経済学科
教授

東川町における朝鮮人労働、同町の町づくりを学ぶ

研修地：東川町

研修目的

東川町では戦時下朝鮮人労働の実態を把握するために、2011年に韓国から当事者を招いて「朝鮮半島と東川の歴史を語る会」を催した。この画期的な催しを支援した東川町の役場を訪れ、こうした取り組みの経緯を聞くとともに、東川町独自の町づくりを学ぶ。

研修地・日程

- 9月9日 バスで札幌を立ち東川町へ
東川町・キトウシ森林公園ケビンにて宿泊
- 9月10日 東川町役場を訪問
東川町内の朝鮮人労働跡地および町づくりの様子を見学
バスで東川町を立ち札幌へ

写真キャプション

- ① 東川町役場に展示されている「君の椅子」。
- ② 「きみの居場所はここだよ」と新生児に贈られる。2006年以降の事業。
- ③ 町役場第2会議室で杉山課長のお話を聞く。
- ④ 共生サロン「こころん」で昼食。
- ⑤ 大雪遊水公園にて杉山課長のご説明を聞く。
- ⑥ 中国人犠牲者の慰霊碑。朝鮮人犠牲者にかんするものはない。



総括

日本植民地下の朝鮮半島で多数の朝鮮人が日本国内の労働力として動員もしくは徴用され、北海道内各地でも動員された朝鮮人がタコ部屋労働を強いられていた。例年わがゼミではタコ部屋労働がおこなわれた道内の現地を訪れているが、ことしは東川町の取り組みに注目し、見学を企画した。「朝鮮半島と東川の歴史を語る会」は町民有志らが組織したものであるが、町がそれに協力し、90歳前後の当事者2名を韓国から招いて「語る会」が実行された。この催しは新聞でも報道され、多くの人々の知るところとなった。

研修ではまず町役場地域活性化課に杉山昌次課長を訪ね、朝鮮人労働実態把握の現状などをお話いただき、あわせて、東川町の概観、特徴、町づくりの取り組み、などをご説明いただいた。

東川町の朝鮮人労働現場はおもに江卸(えおろし)発電所建設工事、江卸発電所にいたる導水管の設置工事、忠別川遊水池建設工事であり、ゼミ一行は町役場会議室で杉山課長のお話を伺ったあと、これらの跡地などを訪れた。

学生研修記

朝鮮人・中国人のタコ部屋労働

東川村江卸の発電所・導水管トンネル、町内遊水池の建設においては、日本人犯罪者・朝鮮人・中国人らが、なんの作業かわからないまま労働に従事していた。労働は一日8～10時間、午前・午後に30分ずつの休憩をはさんで朝5時から夕方5時まで仕事が続くこともあった。

タコ部屋と呼ばれる宿舎では、扉に鍵がかけられ、用便時にも申告が必要であった。タコ部屋は冬の隙間風がひどく、朝になると蒲団のうえに雪が積もっていることもあった。食事は穀物が入ったごはんやジャガイモが多く、量は少なかった。作業中の負傷、伝染病による病死も起こった。タコ部屋から逃亡してもたいてい捕まり、暴行を受けた。朝鮮人・中国人の遺体は粗末に扱われ、トンネル工事の土砂のなかに埋められることもあった。



中川 裕介
地域経済学科2年
深川西高校出身

だれもが住みたくなる美しい町

東川町は旭川市の隣でありながら旭岳を擁し、自然の景観と環境を大切にしている町である。町に水道はなく、地下水を飲むが、この地下水はマグネシウムとカルシウムの割合が1対2で、飲み水の理想に近い。たしかに札幌の水とは違い、新鮮であった。

かつて1万人を超えていた人口は、現在は8,000人を下回るが、町では近年、アパート建設に補助金を出し、また子ども未来課を置き幼稚園と保育園を分けずに子育て支援をおこなっており、住民が増えてきたという。

まちづくりの意識は生活空間にも生かされ、家に原色を使わない、電柱は通りの片側だけ、車庫は通りに直面させず距離を置いて設置する、などの工夫がなされている。東川町はだれもが住みたくなる町をめざしている。



佐藤 里帆
経済学科3年
札幌北陵高校出身

水野谷武志ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 24人



水野谷 武志

地域経済学科
教授

利尻島観光の持続可能性について考える

研修地：利尻富士町・利尻町

研修目的

北海道における貴重な観光資源の1つである利尻島において人口減少や観光産業の担い手不足が指摘されている。本研修の課題は利尻島の観光協会及び観光関連事業者への聞き取り調査を通して、利尻島観光の持続可能性について考察することである。

研修地・日程

9月3日	移動 夕方に利尻島着、ペン岬展望台に行く
9月4日	利尻島の主要観光スポットの視察（甘露潜水、富士野園地、見返台園地展望台、利尻町立博物館、仙法志御崎公園、オタトマリ沼、ラナルド・マクドナルド上陸記念碑、姫沼） 夕食後に勉強会
9月5日	利尻町観光協会担当者との意見交換（交流促進施設など） 利尻町内（省形地区と仙法志地区）の観光関連事業所に聞き取り調査を実施 夕食後に反省会
9月6日	利尻富士町観光協会担当者との意見交換（総合交流促進施設りぶら） 利尻富士町内（鶯泊地区と鬼脇地区）の観光関連事業所に聞き取り調査を実施
9月7日	移動（途中で宗谷岬に立ち寄る） 夜に大学着

写真キャプション

- ① 観光協会との意見交換。② 聞き取り調査。
③ 夕食後の勉強会。④ クラフト体験。⑤ ウニさばき体験。⑥ 利尻富士をあとに帰礼。



総括

宿泊施設、飲食店、お土産屋などの観光関連事業者への聞き取り調査では、利尻島における主要4地区（鶯泊、鬼脇、杓形、仙法志）をカバーすることができ、後継ぎ（将来の担い手）のことで、事業の見通し、利尻島に対する思いなどについて貴重な話しを伺うことが出来た。30件ほどの事業所から回答を得、3割ほどの事業所で後継ぎなしという結果であった。ただし、カバーできた事業所の数は十分とは言えないので今回の聞き取り結果はあくまでも事例的な調査結果としてみるべきだろう。とはいえ、利尻島の人口や観光客入込者数は近年、減少傾向にあるので、観光産業の持続可能な発展に向けて課題があることを確認した。この課題に対して2つの町や観光協会が中心となって、島の宣伝活動の強化、島へのアクセスの充実（フェリー便や航空便の維持・拡大）、外部人材（国の補助事業「地域おこし協力隊」）の活用、クルーズ船寄港への対応、映画撮影の招致（「北のカナリアたち」、2012年11月3日全国ロードショー開始）などに取り組んでいることも学んだ。今後は島全体による取り組みの維持・発展によって、利尻島の素晴らしい自然と共存した形で観光が盛り上がることを期待したい。

学生研修記

離島を活かした観光



桜井 宏隆

地域経済学科2年
札幌啓成高校出身

今回、私たち水野谷ゼミナールでは離島観光の現状を学ぶために利尻島を訪れた。フェリーを降りると山頂が白く雲がかかった幻想的な利尻山が目に入った。2日目には「日本名水百選」にも選ばれた甘露泉水やオタトマリ沼、姫沼に行き、利尻島の豊かな自然を感じることができた。利尻町立博物館では利尻の歴史、人文、自然など様々な分野において利尻を学んだ。また、島の駅という施設では利尻に咲く花を使ったキーホルダー作りも体験し、利尻島の観光は自然が大部分を担っていることを改めて実感した。

お世話になった旅館でも、ウニや昆布などのおいしい海産物はもちろん、女将さんやそのご家族の暖かさも感じられた。今回の研修は、利尻島に来なければわからなかった自然の豊かさや島民の暖かさを知ることができた、貴重な地域研修だった。また利尻島を実際に観光してみて、体験型の観光産業が少なく感じたので、海に触れることのできる環境整備をするなど、さらに自然を活かした観光を進めていくことが島の活気を取り戻すことにつながると私は思う。

利尻島観光の現状



田口 沙也加

地域経済学科3年
北広島高校出身

私たちは今回の地域研修で、北海道観光について研究するため、利尻島を訪れた。そこでは、ゼミ内で作成したアンケートをもとに、観光関連事業所や商店街などに直接訪問し、聞き取り調査を行った。質問項目は、後継ぎの有無や利尻島の町の様子の変化、そして今後利尻島観光に望むこと等である。調査結果については、コンビニやホームセンター等の建設により、生活が便利になった反面、古くからある「まち」の景観が失われたという意見が多くみられた。島で話を聞いた多くの方々が現状に満足していなかったため、今後の更なる発展が求められる。

利尻島での研修を通じて、島の活性化には観光産業の取り組みに力を入れることが重要であることを学んだ。そのためには、島の人々が誇りとする自然や食べ物などの特徴を生かし、イベントや祭りを計画することで、より多くの観光客を獲得する必要があると考える。



山田誠治ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 24人



山田 誠治

地域経済学科
教授

地域活性化・地域ブランド化と情報発信について

研修地：函館市

研修目的

山田ゼミでは、地域活性化・地域ブランドつくりと地域からの情報発信をテーマとし、函館市の観光をめぐる取り組みの現状と課題、およびそのための情報発信について学ぶことが研修の目的であった。行政や関係機関の取り組みの説明を受け、現場での聴き取り調査の形式で、函館ブランドを構築および再構築するための関係者の取り組みについて班別に取材をし、現場の取り組み・活動の実態とその課題などについて学習した。

研修地・日程

- 9月12日 函館市観光振興課
函館山視察見学
- 9月13日 函館市地域交流まちづくりセンター
グループ調査（「街歩き・湯の川」「街歩き・文学街並み」「函館スイーツ」「五稜郭タワー」「いか釣り・体験」）
- 9月14日 街並み街づくり見学

写真キャプション

- ① 函館市観光振興課の説明に聴き入る。② エコな市電を利用して調査。③ イカ釣りの現場。



1



2



3

総括

函館は、観光を軸にして知名度が高いことは知られているが、そのことが逆に新しい展開を阻む可能性があり、また、実際に観光者の入込数も減少傾向にある。こうした状況に対して、函館市がどのような取り組みをしているのか、実際に現場を訪問し、いろいろな発見があった。

まず、函館市が観光のための施策として採っているアプローチは、特に目立つ施設やイベントで盛り上げるだけでなく、市民や民間企業との取り組み・連携を意識し、居住している市民を巻き込んだ「街づくり」の中に、観光都市函館としての魅力を際立たせようというものである。そして、その中に新しい取り組みを積極的に取り入れていき、今までとは異なるコンセプトであることに学生の関心も向いたと思う。また、政策立案の手法についても、データにもとづき、対象の具体的、かつそれぞれの特徴に応じて何が求められているのかを見定め、目標をそれぞれ明確にしている点で、その到達点の高さを感じられた。

班別の調査では、担い手の「熱い思い」を直接学生が受け止め、またインタビューの取り組みでも、単なる受け手だけでなく、作り手の意識、取組、苦労やそれぞれの観光スポットを来訪する観光客からも聴き取り、市の政策がそのどのような効果を生んでいるかを、学生自身が現場で聴いてくると、を課題とした。実際に現場の人たちの苦労・工夫・問題意識に触れながら、その作り手に側に立って、現場からの学びや、聞き方、伝え方への問題意識も醸成したのではないだろうか。

学生研修記

函館ブランドとは

私たちが調べた函館ブランドの特徴は、新鮮な魚介類を使った食のブランドと、もう一つは見どころある街並みである。函館市は魅力度ランキングなどで一位になったこともあり、多くの観光客はこの函館ブランドに興味をもってきています。その函館ブランドが全国的にも影響力を及ぼしているのは多くの理由があることが、今回の研修でわかりました。

全国的に見ても北海道はグルメな地域と言われていて、観光スポットも多くありますが、観光客にとって食は欠かせないことです。その中で、観光客は北海道で最大限に北海道を味わうことができる場所を選ぼうとし、海に面していることで北海道の海鮮を堪能することができるのが函館であり、西洋的な街並みも兼ね、北海道の良さを最大限に生かしていると思いました。

また、函館市の中では、食・観光などと地域ブランドを分けることができますが、それぞれのブランド同士が協力し合い、その相乗効果を発揮しています。観光スポットに函館の地域食材をおくなど、同時に多くのブランドを宣伝し、このようなブランド同士の協力は函館市内で多く見られ、効率の良い宣伝を行っていたと思います。

イカ釣り観光の現場体験から

僕を含めた3年生5人は船に乗ってのイカ釣りを体験しました。イカ釣りをする船の泊まる漁港が出发点です。最初に船長から乗船にあたっての注意事項の説明を受け、ライフジャケットを着け、その後に船に乗り込み、約30分間かけて沖の方へと出ました。天気は晴れていて、船に揺られながら見る海や遠くに見える函館の景色は素晴らしい、とても印象に残っています。沖に着いてからは、船長がイカの釣り方について説明しながら、お手本でとても簡単にイカを釣り上げてみせてくれました。自分も「たくさん釣ろう！」と思ってやってみるも…なかなか釣れず、結果は2時間で5杯でした。一緒にイカ釣りした5人での結果は、多い人で7杯を釣り上げ、合計は20杯ほどになりました。宿舎のペンションに着いてからは、ゼミのみんなで釣りたて新鮮なイカをおいしく頂きました。

イカの釣り方や生態的な特徴、イカが現代の科学や工業にどれだけ貢献しているかなどを体験とともに船長さんから教わりました。今回の地域研修で、船に乗ってイカ釣りという普段できないような経験をする事が出来ました。



法島 賢哉

地域経済学科2年
滝川高校出身

石丸 学

地域経済学科3年
札幌平岡高校出身

34番教室 報告順序

- ① 大貝ゼミ I (別海) 12名
- ② 古林ゼミ I (標津) 12名
- ③ 平野ゼミ I (札幌) 3名
- ④ 佐藤ゼミ I・II (苫小牧・伊達) 25名
- ⑤ 大貝ゼミ II (高知) 9名
- ⑥ 古林ゼミ II (様似) 8名
- ⑦ 小坂ゼミ I・II (帯広) 36名

●出席カード感想文より抜粋

「サラブレッドなど、自分自身が普段興味を持つこと
のなかなか無い事についても知ることができた、
また、他のゼミではどんなことをしていたのかを知
ることもできて、とても良かったと思う。」「他のゼ
ミの人に分かりやすく伝えるように努力して、工夫
をこらしたプレゼンテーションであることが伝わ
った。」[佐藤ゼミ I・II]

50番教室 報告順序

- ① 浅妻ゼミ I (鹿追) 12名
- ② 川村ゼミ I (札幌) 7名
- ③ 山田ゼミ I・II (函館) 24名
- ④ 西村ゼミ I・II (夕張) 27名
- ⑤ 水野ゼミ I・II (東川) 17名
- ⑥ 小田ゼミ I・II (ニセコ) 30名
- ⑦ 浅妻ゼミ II (東京) 11名
- ⑧ 川村ゼミ II (札幌) 5名

40番教室 報告順序

- ① 高原ゼミ I (富良野) 12名
- ② 徐涛ゼミ I・II (釧路) 16名
- ③ 水野谷ゼミ I・II (稚内・利尻) 24名
- ④ 内田ゼミ I・II (上士幌) 16名
- ⑤ 奥田ゼミ I・II (江差) 12名
- ⑥ 高原ゼミ II (富良野) 13名
- ⑦ 北倉ゼミ II (長沼) 22名

「他ゼミのスライドのまとめ方や発表の態度がとて
も素晴らしかったので、来年の報告会では自分達の
発表が他ゼミから驚かれるようなプレゼンにでき
たら良いと思いました。」「行ったことのない場所がた
くさんあり、自分も行ってみたいくなるようなプレゼ
ンだった。プレゼンの資料で自分がこれからレジ
ュメを作っていくときに参考になる点がいくつかあ
ったのでとてもよかった。」[水野谷ゼミ I・II]

「私たちが学習してきたことをもう一度まとめる
ことによって、自分たちが何をしてきたのか改め
て確認できてよかったです。」「ゼミ II の発表はゼ
ミ I と比べ分かりやすく、見やすかったのです
がだなと思った。」[浅妻ゼミ I]
「今回はパワーポイントが見やすく工夫されたも
のが多くて、その点はよかったですと思います。」「発
表としては、どのゼミでもしっかりまとめられ、
わかりやすかったと思います。」[浅妻ゼミ II]





北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2012



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

TEL : (011) 841-1161 (内線2222)

<http://hgu.jp/>

<http://econ.hgu.jp/>

2013年3月発行

制作:(株)ラボット